市政トピックス

石沢麻依さんと鈴木亜弥子さんへ「賛辞の楯（たて）」を贈呈

第165回芥川賞を受賞した本市出身の石沢麻依さんと、東京2020パラリンピック競技大会バドミントン女子シングルスで銀メダル、ダブルスで銅メダルを獲得した鈴木亜弥子さんに「賛辞の楯」を贈呈しました。1月28日に石沢さん、29日に鈴木さんへの贈呈式がオンラインで行われました。

ドイツで生活する石沢さんは、本市出身の作家として初めて芥川賞を受賞しました。受賞作「貝に続く場所にて」は東日本大震災を題材にした作品。郡市長は「震災から10年の節目にこの作品を広く皆さんに届けてくださったことは意義深く感じます」と話し、石沢さんは「この小説は、私がかつて暮らしていた仙台の街の情景や移り変わる季節の感覚などの記憶を再現しています。これからも自分の中にある感覚や記憶と対話しながら、小説を書くことを苦しみつつ楽しみ、全力で向かい合っていきたい」と、穏やかな語り口で、今後の執筆への思いを話しました。

また、日本のパラバドミントン界のエースとして活躍されてきた鈴木さんは、今大会で現役を引退。「市民の皆さんの声援のおかげでメダルが獲得できました。今後は次世代の選手に経験を伝えるとともに、子どもたちにパラスポーツの素晴らしさを届けていきたい」と晴れやかな笑顔で抱負を語りました。郡市長は「渾身（こんしん）のプレーで2つのメダルを獲得され、市民に勇気と大きな感動をいただきました」とその功績をたたえました。

当日は、赤間市議会議長より、「仙台市議会議長特別表彰」の授与も行われました。

石沢さん

鈴木さん

市政トピックス

ストン！と入り込んでしまう石の世界

地底の森ミュージアムでは開館25周年を記念して、企画展「石っていろいろ！仙台のミュージアムの石大集合！」を3月13日まで開催しています。東北大学総合学術博物館をはじめ、市内13のミュージアムが収集するさまざまな特徴ある石を展示。石や加工品を通して、仙台の歴史と暮らしの変化などを紹介しています。

展示の一つである三滝玄武岩（みたきげんぶがん）は、約800万年前、市西部の2つの火山の噴火でつくられたと考えられています。結晶が大粒で硬い特徴を生かして、縄文時代には木の実をすり潰すための石皿に使用されたほか、仙台城の石垣の石材にも使われました。また、仙台市電の敷石に使われ、現在は青葉通地下道の床石として再利用されている花崗閃緑岩（かこうせんりょくがん）も展示。市電廃止後に市民に売り出された敷石を地下道に利用したいという国の要請を受け、市や市民有志が回収したエピソードも紹介されています。訪れた人々は、奥深い石の世界に興味深く見入っていました。

さらに、石に関するワークシートを完成させると、黒曜石などがもらえる「石ガチャ（なくなり次第終了）」も実施。子どもたちが互いに当たった石を見せ合って喜ぶ姿が見られました。

▲三滝玄武岩

市政トピックス

鎮魂の花火　冬空照らし、思いはせる

東日本大震災の津波で被災し、平成29年3月に閉校した東六郷小学校跡地に整備された東六郷コミュニティ広場で2月5日、鎮魂の花火が打ち上げられました。これは平成26年に六郷東部地区の住民やかつて住んでいた方などで結成された「わたしのふるさとプロジェクト」が企画したもので、今年が7回目の開催。このプロジェクトでは、被災前の活気を取り戻し、交流の機会にしたいと、夏祭りや餅つきなどを実施し、地域のにぎわいの再生に取り組んできました。

当日は参加者が慰霊塔に黙祷（もくとう）をささげました。その後、プロジェクト代表の大内文春さんが、津波による流失を免れた旧東六郷小学校の鐘を11回鳴らし、震災から11年の年月を告げると、75発の花火が夜空を彩りました。花火を見上げながらふるさとの記憶をたどり、震災犠牲者の冥福を祈りました。

市政トピックス

障害のある方の豊かな感性と自由な表現に触れる

2月4日から8日まで「きいて、みて、しって、見本市。」がせんだいメディアテークで開催されました。これは障害のある方と芸術文化活動に関するさまざまな取り組みの紹介を通じて、新たな出会いやきっかけにつなげるもの。会場には、障害のある方が制作した絵画や点字の絵本などのバリアフリー資料が展示されたほか、17の団体がブースを出店し、日頃の活動をアピールしました。

5日には、障害のある方とない方が共に創作・表現する場「SHIRO（シロー） Atelier（アトリエ）&Studio（スタジオ）—ともにつくる芸術劇場」の「アトリエつくるて」で制作された作品を作者自身が解説するギャラリーツアーを実施。鮮やかな色調で描かれた鳥と花や、子どもの頃に見た市電の思い出などを描いた作品等、それぞれの作品のモチーフや込めた思いが語られました。女の子のキャラクターを描いたお子さんはオンラインで参加し「家の中を走り回るような元気な女の子を描いた。ピンクの帽子が気に入っている」と、作品への思いを参加者と共有しました。

6日には、障害のある方の学びの場「スウプノアカデミア」の本年度締めくくりのシンポジウムがオンラインで開催されました。第1部ではこれまでの取り組みを紹介し、参加者自身が講座を通して感じたことを発表。「選挙の大切さや災害時の行動を学ぶことができた」「お金の講座を通して将来の夢を考える機会になった」などの感想が語られました。第2部では生涯学習をテーマにしたフォーラムが行われ、障害のある方の学びの場や社会参加について考える機会となりました。

▲障害者福祉施設やアトリエなどのブース。パンフレットやポストカードなどを配布し、来館者との交流を図りました

▲ギャラリーツアーでは、国内外で活躍する2人のアーティストが進行役として、作者と対話しながら作品を紹介しました

3・11震災文庫を読む 52

東日本大震災を語り継ぐため市民図書館に設けた「3・11震災文庫」。所蔵する約1万冊から、よりすぐりの本をご紹介します。

東日本大震災を考える・記憶をつなぐ

東北大学災害科学国際研究所准教授　佐藤　翔輔

「東日本大震災からのスタート 災害を考える51のアプローチ」

東北大学災害科学国際研究所／編
東北大学出版会　刊

東日本大震災。何を頭の中に思い浮かべるでしょうか。災害はとても多くの「側面」を持っています。揺れ、津波、原発事故、命や住まいの被害、こころ・からだ、避難、再建、まちづくりなどさまざまです。本書は東日本大震災の「51」の側面（アプローチ）について、本学の研究者がこの10年向き合った結果と今後の展望についてご紹介しています。全ての側面は、「東日本大震災が明らかにした問題」「震災が破壊したパラダイム（考え方）」「新しいアプローチ」「到達点とこれから」といった共通の4パートを4～6ページで、平易にまとめています。私は「記憶伝承の科学」の執筆を担当しました。

「災害伝承の大研究 命を守るために、どう伝える？」

佐藤翔輔／監修
PHP研究所　刊

東日本大震災は「災害伝承」の難しさや、その大切さを私たちに突き付けました。三陸地方は、津波災害を繰り返してきたからです。一方で、「災害伝承」は、他の地域、他の災害（地震、洪水）でも盛んに行われています。本書は、石碑、古文書、民話、妖怪、お祭り、災害遺構、語り部などの実例を多くご紹介しています。子どもの調べ学習用の書籍ですが、ぜひ大人の方にも手に取っていただきたいです。

40年以上前、宮城県沖地震が起きました。毎年6月12日前後に、ある大学の講義で「6月12日は何の日？」と問い掛けてもほとんど答えることができません。皆さんと未来の命を守っていきたいです。

●紹介した本は、市民図書館でご覧いただけます　問市民図書館☎261・1585